

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

「インターハイ登山競技ってなに？」山と溪谷 11月号に掲載

「山と溪谷 11月号」に、今年苗場で行われたインターハイの様子が紹介されている。高校山岳部関係者にはいわずもがなだが、世間の人への認知度はイマイチのインターハイ。今年見事に優勝した新潟県立県央工業のメンバーと長年その指導にあたってこられた吉田光二先生に取材したその記事は、インターハイを知らない一般人ばかりでなく、インターハイを知っているつもりになっている我々ももう一度原点を考えて見るにはいい記事である。同じ山と溪谷から出版されている「ワンダーフォーゲル」の8月号にもやはりインターハイについての記事が掲載された。そちらは、神奈川県立麻溝台高校が取材対象になっている。

インターハイの登山競技は、開催基準要項前文には「全国高等学校登山大会は、全国高等学校総合体育大会の一部門として広く高等学校登山部生徒の技能の向上とスポーツ精神の高揚をめざし、さらに、自然を愛する情操を養うとともに相互の親睦をはかり、山を教育の場として心身ともに健全な生徒を育成するものである。」とある。さらに、全国高等学校登山大会成績評価実施要領には「この登山大会の成績評価は、単に優勝を競い順位を争うためのものではなく、大会の趣旨を尊重し、登山の基礎的な技術・態度を着実に実践できることを主眼として次の基準によって行うものである。」ともある。競技である以上、順位はつけるし、そのための審査は行うのは当然である。が、インターハイの趣旨はやはり、ここに明確に示されている通りだ。「山と溪谷」で吉田さんが「単に順位や点数に一喜一憂するのではない、この大会を通じて山のすばらしさ、そのための安全登山について、まずは学んでもらうことが我々の役割だと思っています」と述べているが、ここが原点だ。後述するように先週末、北信越5県の高体連の連絡協議会が福井県で開催されたが、この原点に則って今年の北信越大会とインターハイについても総括された。とまれ、興味のある方はご覧ください。(でも…もう店頭には並んでいない…)

北信越5県高体連登山専門部協議会

11月10日、11日に福井県大野市の六呂師高原にて、第32回北信越高体連登山専門部協議会が開催された。協議会には、5県から30名の先生方が出席し、インターハイ、北信越大会、国体をはじめとする高校山岳部に関する諸課題について熱心な議論が交わされた。今年度の北信越大会については、予想外の残雪で会場を白山から白山釈迦岳に移動せざるを得なかった上、当日は雨。担当の石川県からはその点お詫びがあったが、山が相手故こればかりは致し方ない。一番その山に精通している担当県の判断に誤りはない。その点で参加した各校からは感謝の気持ちが表わされた。北信越大会は、期日が6月3週という悩ましい時期に行われている以上これは織り込み済みである。将来いつの日か、このことを思い出してまた白山に登りに来るOB、OGが現れることだろう。

さて、今年は、ブロックでインターハイの開催があり、登山競技は新潟県が主管した。したがって新潟県はもちろん、近県審査員としてブロックから多数の先生方がインター

ハイに関わったこともあり、インターハイについては例年以上に活発な議論がなされた。とりわけ議論が集中したのは、今年度の部報別刷りに掲載された「チーム行動について」についてと先の専門委員長会議に提案された「コース規程(案)」についてであった。全国高体連の懸案事項については、通常、最高議決機関である専門委員長会議は年一回、また常任委員会も一定の間隔で行われているわけではないという組織の性格上、ある程度は実績を積みながら、時には議論に先行して決定が後追いになるようなこともあるが、この2点については、どちらもやや唐突な感を否めないというのが5県共通の正直な感想だというふうを受け止めた。

したがって、これらについては、北信越ブロックとして一定の意見集約がなされたので、今週末23、24日に行われる全国高体連の秋期常任委員会に常任より意見書として提出することとなった。その心は、インターハイの目的を再確認した上でその本来的な主旨に則って大会を運営、また審査してほしいということである。私自身も常任委員会に出席する立場の人間として微力ながら、目指すべきインターハイの姿について率直に意見交換をし、よりよいものになるように尽くしたいと考えている。

仮称)池田町総合型スポーツクラブボルダリング

池工の地元池田町の体育協会から、地域総合型スポーツクラブの立ち上げに協力してほしいという要請のあったのは、去年の今頃のことであった。曰く2013年度からの実施を目指しているこの活動の種目の一つにボルダリングを取り入れたい。当面、準備段階として2012年は、期間を区切って体験的に様々な種目を行いたいが、ボルダーについては秋口に行く予定で進めたい。については、ハード面としては池工のボルダーを活用させていただき、ソフト面では山岳協会の協力を得たいとお話だった。



それを受けて小生は、まず学校長とかけあって会場使用の問題をクリアした。さらに山岳協会のスポーツクライミング委員長の中嶋岳志さんや山岳総合センターの協力、さらには将来的には小生自身が池工を去っても続くことを考え、地元の山岳会員やクライマー数人に声をかけて準備を進めてきた。声を掛けた方々は皆快く引き受けて下さり、11月11日にその第1回目、そして18日には第2回目が行われた。申し込んできたのは大人が8名、子どもが6名。この日のために、クラブから若干のホールドも買っていただき、地元クライマーの塩月さん、渡辺さん、丸山さんに課題も設定してもらい初回の11日を迎えた。当日は、主任講師を中嶋さんが担当、そこに池田町の榛葉さん、池工山岳部コーチもしている山内さんと小生がサポートした。

最初に中嶋さんからボルダリングについての説明をしてもらい、どんなところに危険性があるのかを理解してもらった上で、全員で準備運動をし、大人と子どもに別れ講習を開始した。参加者からは「初心者向けの分かりやすい内容ですごく良かった」「子どもが日曜日になるのを楽しみにしている」「指導者の指導内容や人柄ともに良く、親としてはぜひ続けてもらいたいと思った」「子どもが楽しそうにやっているから付添いの親までやってしまった。次回からもやりたい」など、とてもうれしい感想をいただいた。この流れが途切れないように、次年度にうまくつないでいければと考えている。

